

杏林医学会 第16回例会 開催報告 「New aspect of parasitic diseases in India」 (演者：Rakesh Sehgal 教授)

医学部感染症学教室寄生虫学部門

小 林 富美恵

2016年2月24日に基礎棟3階会議室にて第16回杏林医学会例会が開催された。感染症学教室寄生虫学部門では、平成26年に科学技術振興機構（JST）の戦略的国際科学技術協力推進事業（SICP）日本-インド研究交流プロジェクトに採択され、それ以来、北インドの都市 Chandigarh にある研究／教育機関 Postgraduate Institute of Medical Education & Research (PGIMER) と「三日熱マラリアの重症化機序の解明」を主なテーマとして共同研究を行っている。本例会では、JSTから事業の一部を移管された日本医療研究開発機構（AMED）と杏林大学とが共催するSICP国際シンポジウムで講演するために来日されたPGIMERのRakesh Sehgal教授（医寄生虫学）に「New aspect of parasitic diseases in India」というタイトルで、最近のインドにおける寄生虫感染事情について講演して戴いた。その講演内容は以下の通りである。

インドでは今もなお多くの人々がマラリア、カラ・アザール（内臓リーシュマニア症）、リンパ系フィラリア症に苦しんでいる。また、抗マラリア薬や抗リーシュマニア薬に対する薬剤耐性原虫の出現が大きな問題となっている。インドのNational Vector Borne Disease Control Programme (NVBDCP)によれば、マラリアについては2014年に100万を超える症例が報告され、Bihar, Jharkhand, Uttar Pradesh, West Bengalを中心とする

流行地で1億6000万人を超える人々が感染の危機に晒されている。これらの多くは農村部に住み、経済的に厳しい状況にある人々である。リンパ系フィラリア症はインド国内の250に及ぶ地域から報告されており、マラリアに次ぐ公衆衛生学的問題となっている。下痢症を起こす寄生虫や土壌伝播蠕虫感染症が、衛生環境の劣悪な環境に住む子供たちの死亡率上昇の要因となっている。2014年10月2日、マハトマ・ガンジーの145回目の誕生日に、インドのナレンドラ・モディ首相は‘Swachh Bharat Abhiyan’（英訳：‘Clean India Mission’）を合い言葉に「インド国民総出で、国の環境を清潔に保とう」という大がかりな活動を開始した。

一方、神経嚢虫症などは癲癇の原因として重要視されるが、インドでは主に有鉤条虫の虫卵に汚染された果物や野菜を食べて感染する。また、トキソプラズマ原虫に対する抗体を持たない妊婦が本原虫に感染すると、胎児に先天性トキソプラズマ症を誘発するが、本疾患もインドには多い。免疫不全の患者では、主に腸管での日和見寄生虫感染症により慢性の下痢や体重減少を引き起こす。インドにおける寄生虫感染症は、全ての世代に負の影響を与えている。より高い診断技術やより効果的な治療法に関する研究を進め、人々にそれらを普及することによって、寄生虫感染症を減じていくことが求められている。

